

聾学校に在籍する生徒の携帯電話の活用とその課題

田中 千尋

I. 問題

聴覚障害者は、自宅、仕事場、街中などの環境において、テレビ、電話、家電製品の警報音、サイレン音など、必要性の高い情報が聞こえないことから日常的に不利益を受けている。しかし近年では聴覚障害者のコミュニケーションを支援する機器として、携帯電話が注目されるようになってきた。

当初は、携帯電話は音声でしか使えなかったため、聴覚障害者には縁が薄いもの思われていたが、メールなどの文字通信が可能になり、多くの聴覚障害者に使われるようになった(尾田・宇根, 2000)。現在携帯電話は、GPS機能が導入され、火事や事故などに遭遇した時の緊急連絡手段としての使用など、居場所を確認するために活用されるようになった。会話などの日常的コミュニケーション以外の用途も検討されてきた。

聴覚障害者が携帯電話を利用する利点は、「文字モード」である携帯メールを使用することによって、遠隔地間のコミュニケーションが実現されることである。さらに、メールの文章をストックできる携帯メールの特徴から、使用者の都合に合わせて何度もメールを見ることができ、即時的に反応しなければならない音声を使用した電話に比べて聴覚障害者にとって有利な特性を持っている。

聴覚障害者にとって携帯電話は、非常に有効なコミュニケーション手段である。さらに、携帯電話のアプリ機能を活用し学習することができるようになり、生活状況は変化したと考えられる。

しかし、聴覚障害をもつ若年層の携帯電話の利用状況はあまり調査されておらず、携帯電話が

どのように使われているのかや、課題については不明な点が多い。

II. 目的

本研究では、聾学校に在籍する生徒の携帯電話の活用について調査を行い、聴覚障害児が携帯電話を持つことによって、生活、特に対人コミュニケーションがどのように影響を受けているかということ明らかにすることを目的としている。聾学校に在籍する中・高校生を対象にアンケート調査を行い、携帯電話の活用状況を分析し、その利点や課題を明らかにする。

III. 方法

1. 質問項目及び調査方法

予備調査の結果を踏まえて質問 33 項目を決めた。聾学校中学部・高等部の教師が質問文を一つずつ説明し、生徒に回答させた。

本調査は 2006 年 7 月～9 月に行なった。

2. 対象者

聾学校 3 校の中学部及び高等部の生徒 56 名を対象とした。内訳は中学部 23 名、高等部 33 名、そのうち男子 30 名は女子 26 名。

IV. 結果と考察

聾学校に在籍する生徒の、携帯電話の所持率は、中学部・高等部とも 100%である。厚生労働省の 2004 年度全国家庭児童調査では、携帯電話や PHS の所持率は、中学生で 48.3%、高校生で 91.8%であった。今回の調査結果と厚生労働省の 2004 年度全国家庭児童調査の結果を比較すると、聾学校に在籍する中学部の生徒の、携帯電話の所持率は高いといえる。

携帯電話での、インターネットやメールの使用状況は、「1 時間以上使う」と約半数が答えてい

る。さらに「1日2時間以上」という回答は中学部が22%、高等部が27%であった。男子の携帯電話の使用と、女子の携帯電話の使用は、あまり差がなかった。しかし、女子に「2時間以上」使うという回答が31%を占め、男子(18%)より多かった(図1)。

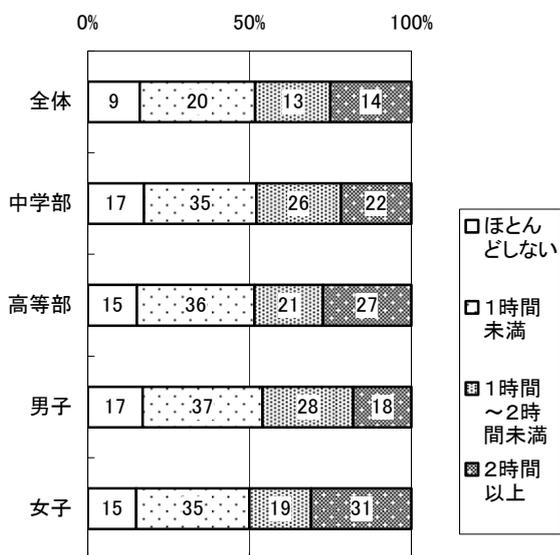


図1.携帯電話の使用時間

今回の調査では、多くの生徒が、すぐ連絡がとれ、言いたいことがいえる機会が増えたと答えている(図2)。また、利点をたずねた質問には、音楽が聴ける、簡単に情報をとれる、カメラで思い出を残せるなどの携帯電話の機能を活用している生徒が多いことも明らかになった。

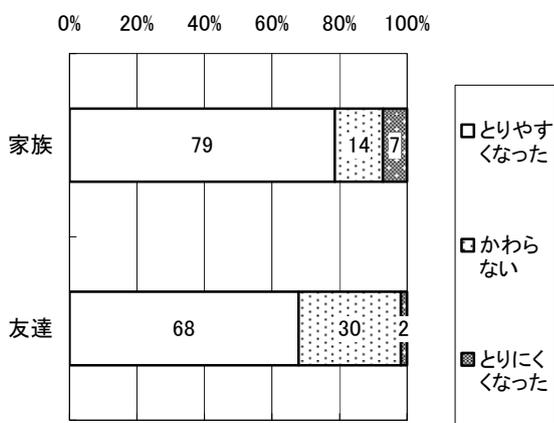


図2.友達・家族と連絡がとりやすくなったか

「家族や友人とメールで話すことが多くなった」と「家族や友人の仲がよくなったと思う」という質問に対する回答の相関関係がかなりあった($r=0.557$)。このことから、メールでも話す機会が多くなったから仲良くなったと考えられる(図3, 4)。

濃添(2004)の結果である、必要な時にその場で通信の手段として使用できるということと、「文字」である携帯メールを使用することによって、遠隔地間のコミュニケーションが実現されるという2つのメリットがあり、聴覚障害をもつ生徒にとって、メールは欠かせないコミュニケーション手段として活用されていることが明らかになった。

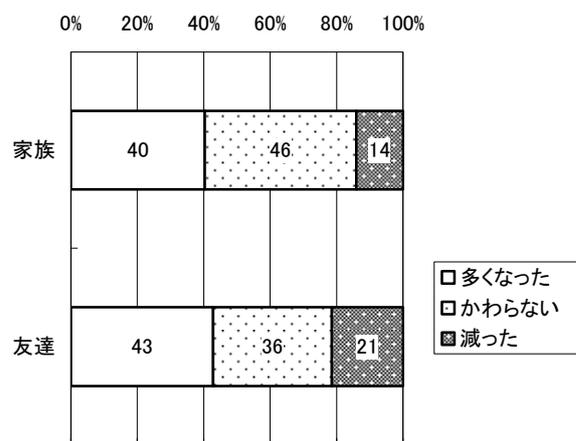


図3.友達・家族と話すことが多くなったか

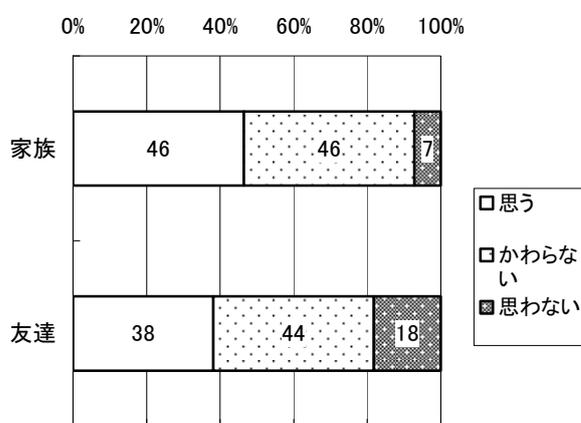


図4.友達・家族と仲良くなったと思うか

携帯電話を持って困ったことについて「絵文字がないと怒っていると思われる」、「携帯会社に関係なく絵文字をおくれたらいい」、という回答が多く見られたことから、聴覚障害生徒が携帯でコミュニケーションする時には絵文字が欠かせないものであると思われる。携帯メールを使用してからの生活の変化について、友人と喧嘩することが「増えた」と 48% が答えている (図 5)。このことから、中村 (2005) と同様に、意図する通りに日本語の文章が書けずに誤解を生じていると推測され、この点からも絵文字の重要性がうかがえる。

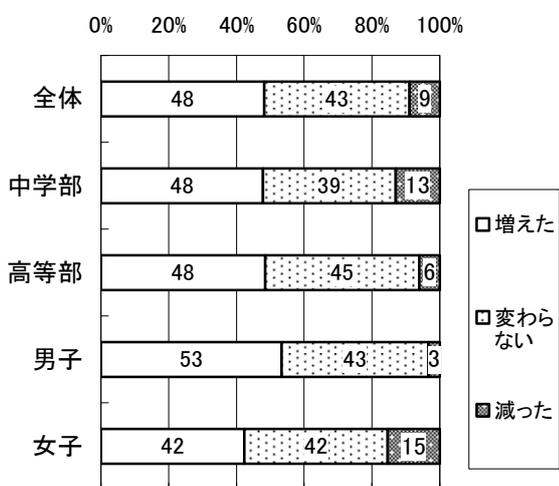


図5.メールが原因で喧嘩が増えたか

くい」という回答もあり、彼らの持つ言語力が影響していると考えられる。携帯電話のマナーやメールに関する指導を、どう展開していくかが課題であると考えられる。トラブルに巻き込まれないためにも、対応できる情報リテラシーを身につけること大切である。

語学学習等を目的としてのドリル型の教材やゲームなど、携帯電話対応のソフトが盛んに開発されている。携帯電話は、通話のための機器ではなく、余暇を楽しむ機器に発展している。そのシステムを学校生活にうまく取り入れていくかが課題であろう。

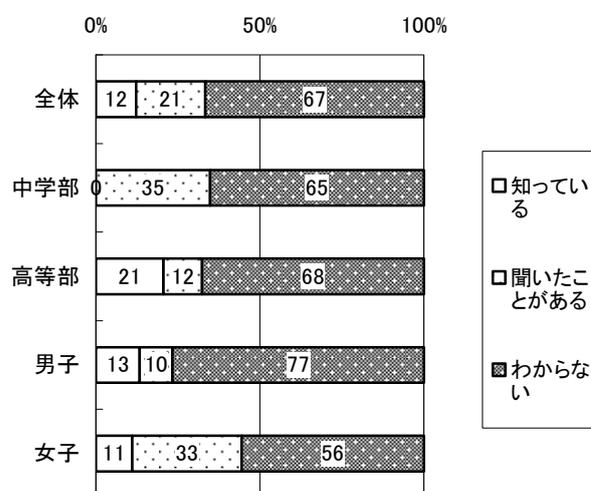


図6.「メーリングリスト」という言葉の理解

今回の調査で、多機能の携帯電話が生活に浸透していることは明らかになったが、携帯電話を使用する上で関係する言葉や機能についての知識・理解は、まだ不十分であることがわかった。

「メーリングリスト」について、高等部の生徒では「知っている」という回答が 21% あり、中学部の生徒では「知っている」という回答は 0% であった (図 6)。さらに、「メーリングリスト」を利用したことがあるかという質問に対して、「利用した」という回答は、全体で 1 割に満たなかった。メーリングリストは特定多数の人とのコミュニケーションをとることに對して、便利な機能であるため、活用を促したい。また、携帯電話を持って困ったことについて「説明書などがわかりに

V. 文献

- 中村好則 (2005) 聾学校における社会参加と自立のための情報教育の推進. E スクエア・アドバンス成果発表会. 100-101
- 濃添晋矢 (2004) 聴覚障害と知的障害のある生徒における携帯メールを使用した「おつかい行動」の獲得. 立命館人間科学研究. 7, 181-191
- 尾田継久・宇根正美 (2000) 聴覚障害者の携帯電話 / PHS の E メール利用について. 第 15 回リハ工学カンファレンス講演論文集 571-574
- 尾田継久・宇根正美 (2001) 聴覚障害者コミュニケーション機器の開発. 平成 12 年度福祉のまちづくり工学研究所報告集, 114-119.